

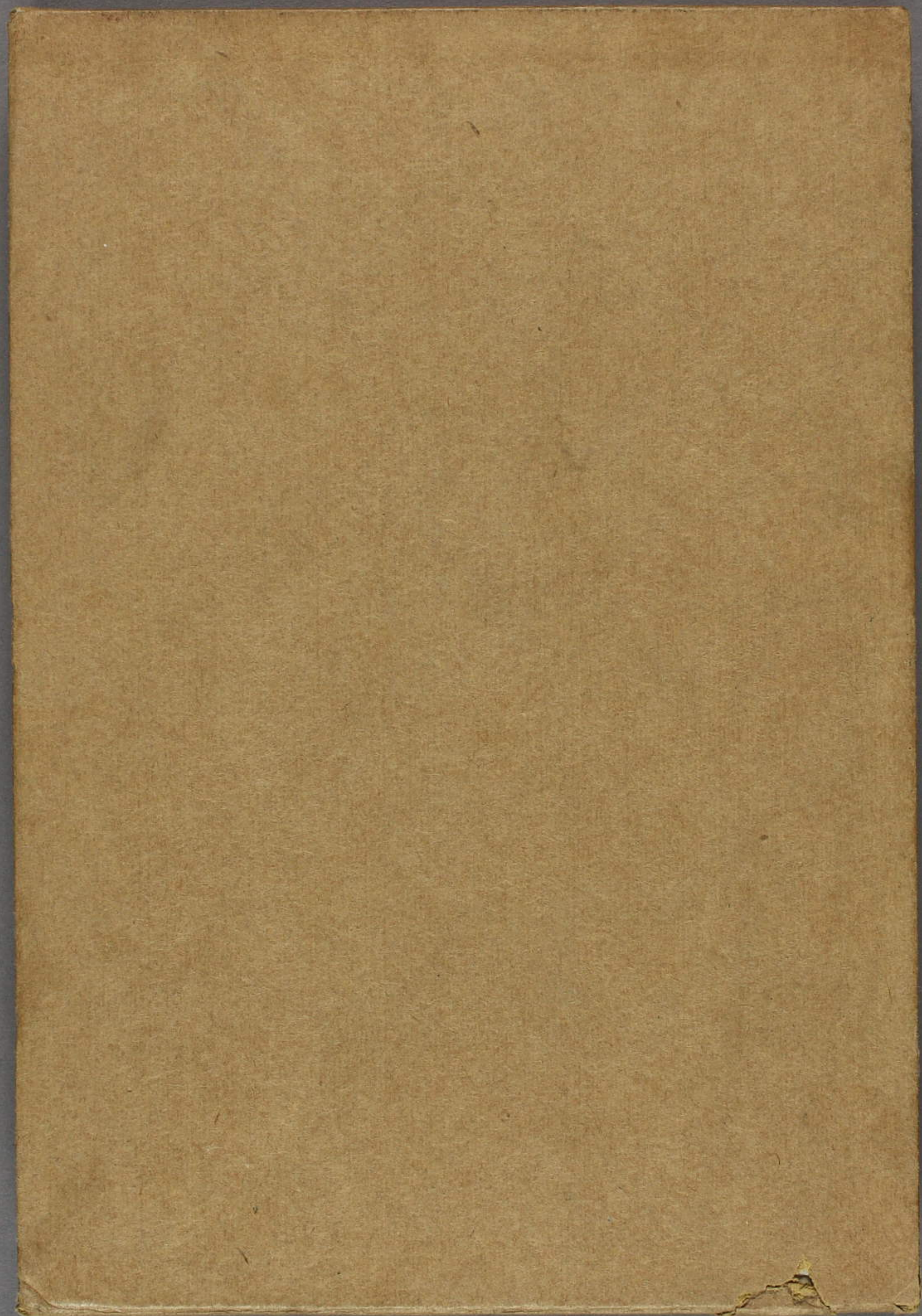
御風歌集



春秋社發行

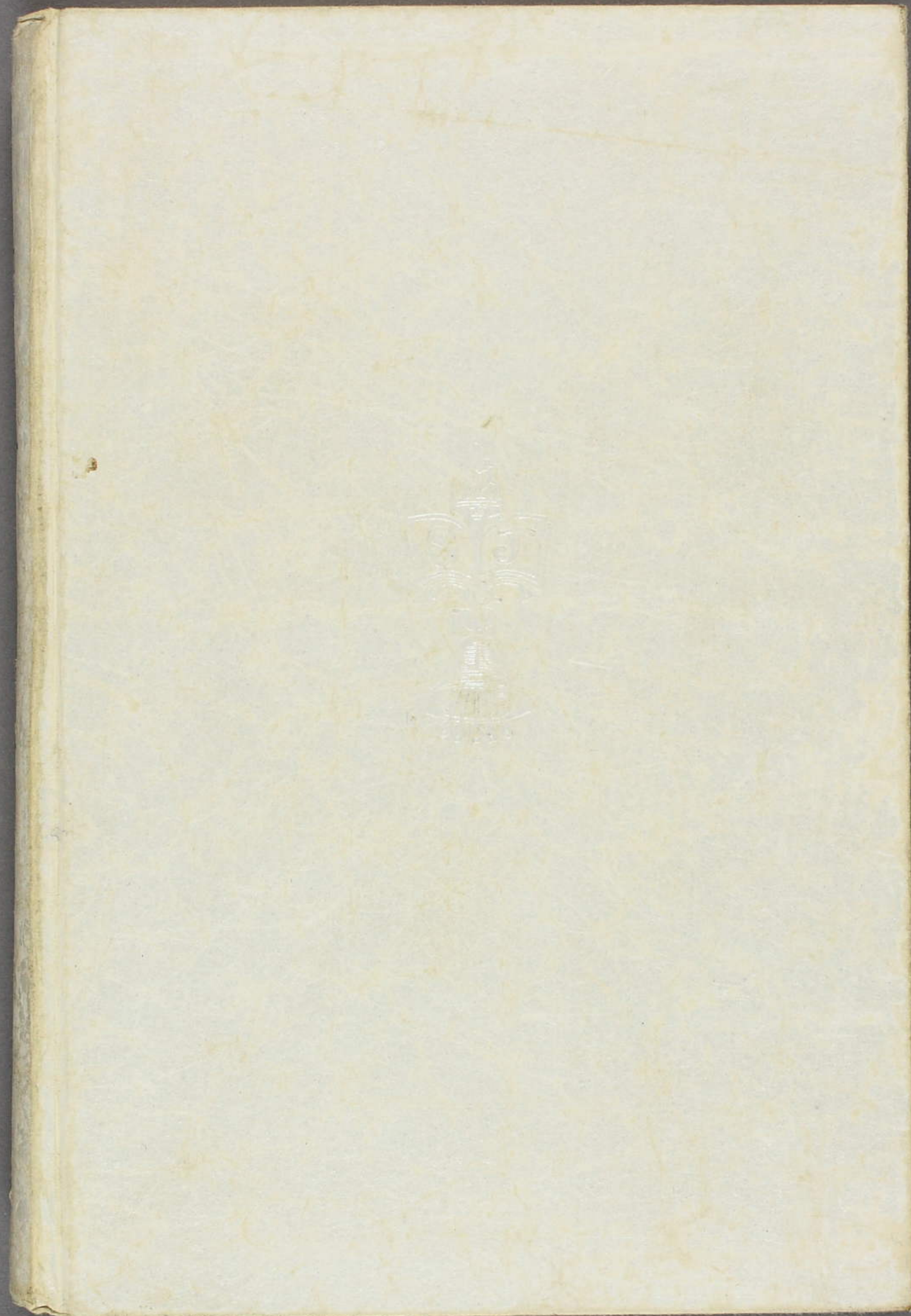


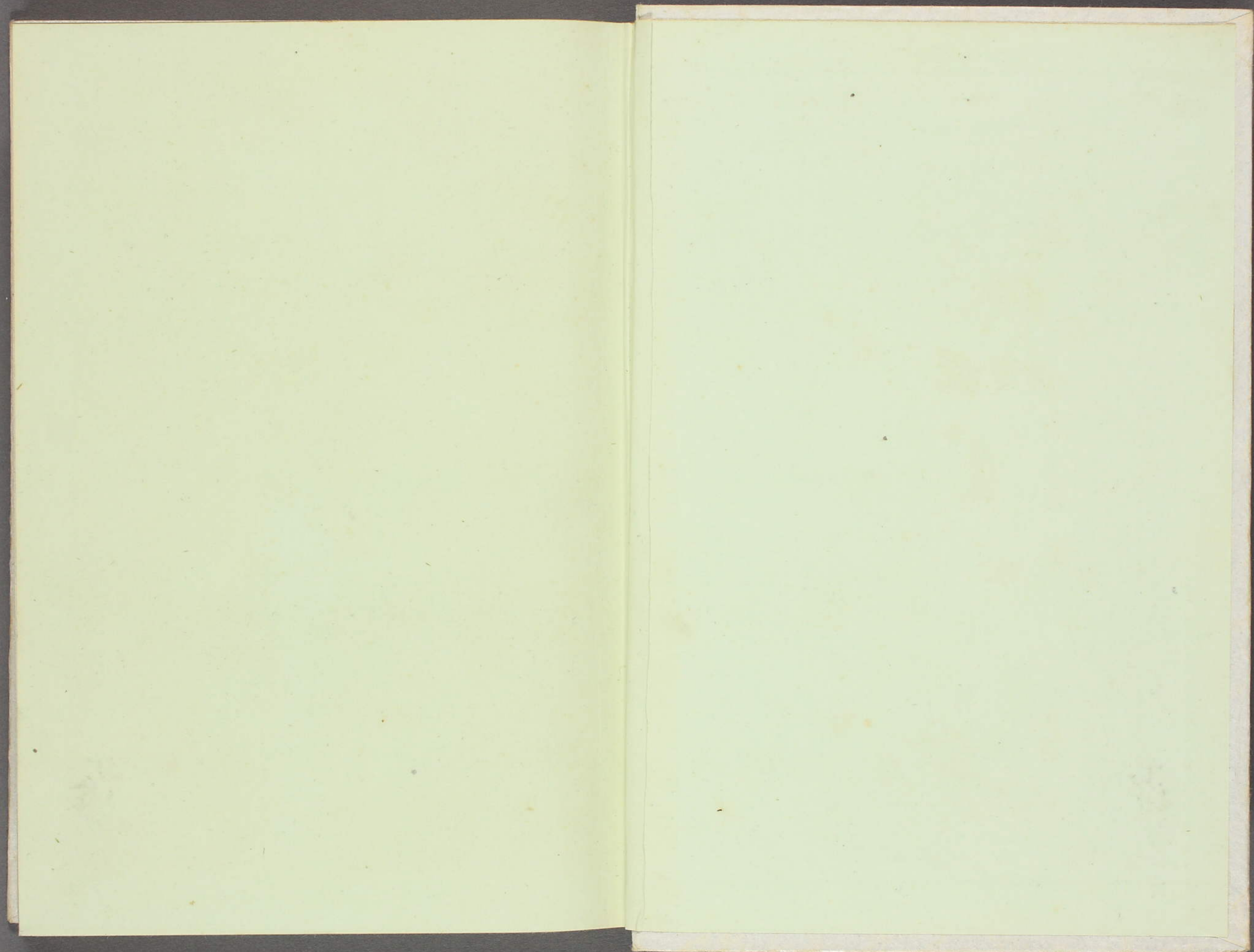
御風歌集





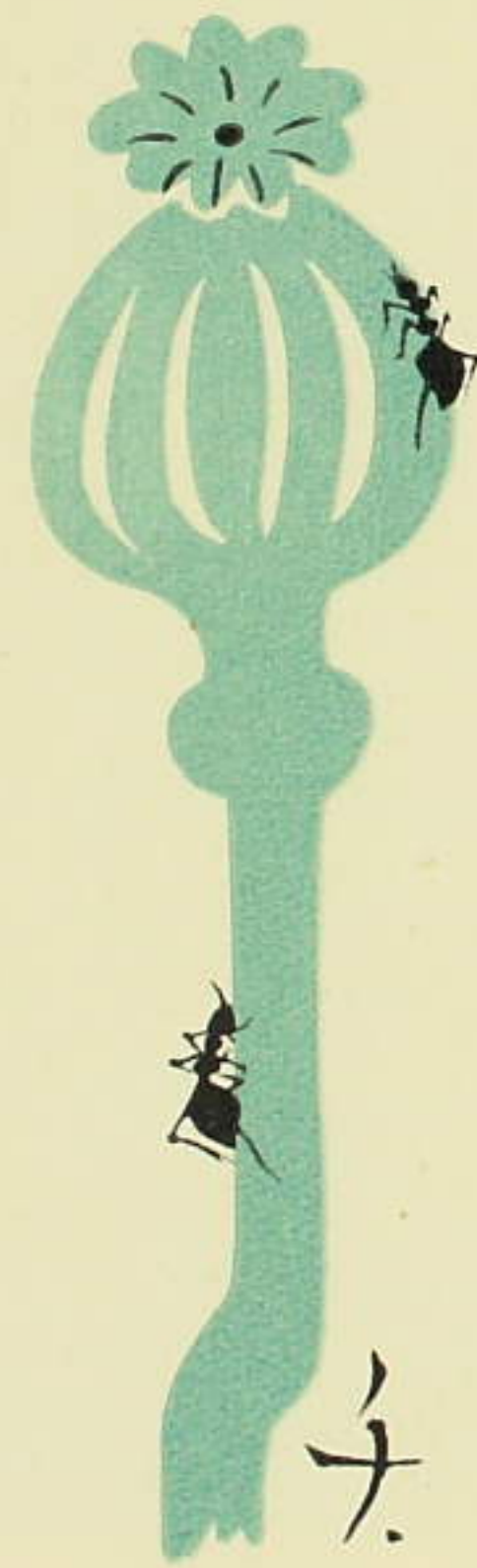
御風歌集





御風歌集

相馬御風著





口繪……………安田靱彦

装幀……………郷倉千靱

はしがき

私が東京を去つて郷里に歸住してから此の春で丁度滿十年になる。此の十年はずぬぶん長かつたやうでもあり、またつひ昨日のやうな感じもする。開業十周年といつたやうなたぐひとは無論ちがふが、しかし何等か私の郷土生活十周年といふやうな意味の紀念をみつからの爲にのこして置きたい氣持に動かされて、私は此のさゝやかな歌の集を編んで見た。歌は私の最も純眞な表現だからである。歌をよむのを私は私の仕事さと思つてゐない。時々よまずに居られないからよむ。そしてそれが私には貴い歡びなのである。それで、作るつもりでもなく、此の十年の間に一千二百首の歌がいつの間にか手帳に書きためられてゐた。この集はその中の約半數を選んだのである。

此の歌の集を刊行するに當つて、私は私の數少ない愛蔵品の一つとしてゐる安田靫彦氏の『五合庵の春』の下繪の複製を以て巻頭を飾らして貰ふことにした。この原作は先年安田氏と良寛和尚遺跡めぐりの旅をした折の紀念として、特に同氏から私に贈られたものである。これを此の集の飾りとするには、やはり私にさりて一つの意味深い紀念なのである。なほ装幀は郷倉千靫氏を煩はした。兩氏に對しては今更でもないが、深い感謝を捧げる次第である。

大正十五年四月二十七日

越後糸魚川にて

相馬 御風 記

大正五年

大正五年
五月
...

しめやかに濡れたる朝の砂はまに一すぢ長くつゞく
足あと

なれぬ手に播きし種さへをよしくも土をもたけぬ來
て見よ吾子等

蠟燭の光に本を讀むこともわがならはしとなりぬこ
のごろ

桐の花のかほりたゞよふさ庭べに今日のひと日は暮
れにけるかも

わが指を乳吸ふごとく吸ひながらねむる子の顔見つ
ゝ酒飲む

〇こころよき疲れをおほゆ草にねて若葉の梢仰ぎてあ
れば

〇草いきれむせかへるごとき中にして野いばらの香を
嗅けばさびしも

まごやしの白き花咲く丘の邊に捨ておきしわが少年
の夢

黄ばみたる小麦ばたけの片すみにのびのびと咲ける
野あざみの花

東京の借り家の庭に置きて來しダリヤも今か芽を出
しぬらむ

どこやらに藁うつ槌の音ぞする五月雨の朝の窓に
よれば

ましろなるうがひ茶碗の水の面に梅雨晴はるの朝の空ぞ
うつれる

東京の話をわれにきく人もすくなくなりて夏は來に
けり

さみだれのしばしの晴れ間出て見れば磯べに白き犬
のあゆめる

生きたるものほしきばかりに雞を飼ひぬまづしき心
なぐさに

うつらうつらわがねてあればまくらべに二つ三つ蚤
の跳ぬる音すも

ころけよといへば裸の子どもらは波うちぎはをころ
がるころがる

水くゞる子等たふとしも總すく身しんに光放ちて水をいで來
も

思ふことさはにしあれど事もなく日は山を出でゝ海
に入るなり

かつてわがわらぢがけにてあゆみける道を汽車より
見て過ぎにけり

鮎はみゝづをわれはまたその鮎をねらふなりまひる
静けき夏の小川に

こゝろよき飢ゑといはんはもたいなし釣りのもどりの
われの此の飢ゑ

熱を病むわが子の脈をさぐりつゝ窓ごしに見る日ま
はりの花

闇の夜の野みちにひとり光れるはわが手にもてる螢
のみなり

縁側にわがひるねしてありし間に雞トリは卵を生みにけ
るかも

兒が夜泣きひたとやみたるしづけさの底にかほそく
鳴きぬ松虫

ひいまこゝをいでしばかりに落日カクの光にとけて舟は見
えずも

朝のうみ鷗一羽のはゞたきに光りそめたりうごきそ
めたり

かりそめの釣りの仲間にいっしかも競ひごゝろがい
でにけるかも

あけてある舟に腰かけ初秋の日の入る海のはての山
見つ

おほつかな能登のみさきのさきつべに行きどころな
くたゞよへる雲

夕月のてりのまがひに秋萩のちりこほるゝを見つゝ
飯はむ

あはたゞしく雲大そらをうごくかな月のひかりのい
とさやけきに

大雨のふりすさぶ中をいづこにかこほろぎ鳴けりた
ど一つ鳴けり

秋祭りわが家の前の空地をば借りに來たれりオット
セイ賣りは

わるぐさきオットセイの死骸それなくば何業をせし
男なるらむ

オットセイの死骸一つを持ちまはり男一人が生くる
なりけり

わが子等がいとも好める「釣ごつこ」われ魚となりて泳
ぐまねしつ

いくさいんのまねをしこのむわが子らをわれ馬とな
りてのせて走りつ

嘘をいふことをおほえし子の顔をしみじみながめ泣
き居つ妻は

秋山のこの高どころ我とあるこれやわが妻これやわ
が子等(山にぼりて二首)

こゝにして眺めて見れば住みうといふわれらが里も
よきところかな

大 正 六 年

餅を焼く香ほのほの雪の夜の狭きわが家にこもりぬ
るかも

かりびとがもて來し雉子のながき尾のながきがさき
につけるもみぢば

かりびとがもて來し雉子ゆわれの手にしみし血の香
の消えやらぬかも

山の鳥らしきり庭べに来てぞ鳴くをちの山々雪や降りけむ

冬を來る山の鳥らにはますべきよき實みのなる木うるまくほりす

正月の二日の朝のつくゑに倚りわれまづ指の爪をきりたり

藁ぐつのはきのよろしもいくとせを見だにせざりし
これのわらぐつ

わら沓をはきてあゆめばこゝちよくわが足の下に雪は鳴るなり

一夜さにやつと一足つくるてふこれの藁沓五錢で買
ひたり

出かせぎの娘の荷物櫃につみ町に出で來し山の親爺
等

出かせぎする工女の數の百あまり雪道にながくつど
きたるかも

停車場のストロブ圍み十ばかり藁沓が白き湯氣立て
ゝ居つ

いけつどきはやも五十日となりにけりいさりをども
は何してあるらむ

春近し

屋根の雪しきりに今日はしづれ落つ春のぬくみのき
ざしたるらし

むら消えの雪かきわけて露の臺二つ三つ四つ摘みに
けるかも

これやこの雪かきわけてわがつみしほろほろ苦き露
の臺かも

雪の中ゆわがつみて來し露の臺を父はわけてもめで
ましにけり

雪やけの痛みに脅え泣く子等をすかしつゝ妻よ幾夜
かも經し

春きたる

ましろなるをちの山々ほのほのと見えつゝもこゝの
里は雨ふる

子どもらと風をあけつゝいつしかに空のふかきに見
いるなりけり

子どもらと凧あけ居れば生きの身の生きのかなしみ
空ゆ降り来る

若草のなかにまじれるつくしんほつくづく見ればい
としかりけり

くづ魚を漁師三人がくぢ引きてわけてもちかへるわ
が家わが家へ〔海濱所見〕

土煙いくすぢほそく立つを見つゝ春のひるすぎ草む
しるわれは

子どもらのいさかひ日々にあらくなりしけくなりゆ
くかなしむべきか

山にあそびて二首

こゝにしてわが食む飯のうまさこそまことのいひの
うまさなるらめ

竹やぶをかきこそ鳴らし匂ひ出しは竹の子とりの女
なりしかな

高波の戸にひよく夜をるろりべに子等に食ますと芋
焼きにけり

山畑の畔にやすらひ谷かけの小田の蛙をきくにける
かも

山に来て君とわが飲む冷酒のうましやうまし春の日
くれそ

谷川に洗ひてはみし浅葱あさあじの白根しろねの味のわすらえなく
に

春の山伐りたふされし大木の響にしばしとよめきに
けり

春されば人等ことごとく野にいでしづもりふき山
もとの村

柏の葉摘むとわが來し丘のべの風いまださむく身に
しむあはれ

摘みとりてかけばうれしもわがほりす薫はありぬ柏
の若葉

これやこの柏若葉に餅つゝみ子等に食はせむかほり
よき餅を

七月十三日國上山の麓にて

あまつたふ日はかたぶきぬ良寛がいほりの跡も近し
ときくに

八月七日良寛和尚誕生の地出雲崎にて

いづも崎いにしへ人もふみしてふ道たどりつゝわれ
は來にけり

秋ちかき頃

ぬか漬の茄子の齒さはり今朝をふとつめたくおほゆ
秋來たるらし

子をおひてあかときわれのいてゝ見る海にもしるし
秋のけはひは

とんほとんほ木の葉にとまれ子どもらが來たらそら
へとまひあがれかし「子等と戯れて」

二夜三夜むかひの家の籠こになける虫の音を妻といと
しみにけり

とたん屋根の家に住めれば秋の夜のしぐれの雨のわ
けてわびしき

肌さむみこれの夜頃をいねがてに遠居る友のたれか
れおもひつ

まづしかるわが家の宵の食卓しきだのかたへにひらく夕が
ほの花〔花夕顔四首〕

電燈の光みなぎる部屋ぬちにわれ等ひそまり夕がほ
を見る

音もなくしづかにひらく夕がほの眞白き花を夢か
とぞ見る

まよなかの月にも似たる夕がほの白くさびしき花の
いろかも

わが家に飼へる雌雞一羽この日頃集につきて離れず、熱氣
そが腹部にあつまりしにやあらむ、そのあたりの羽毛悉く
ぬけおちて赤き肌いたくしげに見ゆ。わが父の君のたま
ふやう、われら雞を飼ふは卵をうませんが爲なり、雞をふ
やさせんが爲にあらず、かくていたづらに日を経んよりは
しかず、一日も早くかの雌雞を巢より離れしめんにはさ。
折から人の來るあり、そのよしを聞きてさかしげにいふや
う、そはいさやすし、かの雌雞の全身を凡そ半時がほご水
中に浸して冷しやらば足らむものと、父の君いたくよろ
こびたまひ、さそく大きなバケツに水多く入れそが中
かの雞のむづかり騒ぐを強ひて足をいましめ、羽がひをし

めて浸したまひぬ。かくの如くしたまふこそ凡そ半時、手の加減いかにかしたまひけむ、ふたゝびさりあげたまひし時かの雞いつしか息絶えたりけり。知らぬあやまちさはいへ、かなしくいたましき事したまひけるものかなさ、皆々くやめどもせんなし。死にたる雞の肉くらはどくらはるべけむも、おのが家にやしなひ來つる生き物の肉くらはむも心もさなし、さやせんかくやせんささまさまにまよひぬるはてに、そがむくろを海に水はふりせんこそいさよからめさいふに皆々うべなひつ。われそが事にあたりぬ。

あやまちて父がころせし生き物のむくろ捨てんと海にわがゆく

蒼白くほの光りする波の穂をやみ夜の底にしばし見
つめつ

はてもなき闇の奥より寄せて來る蒼白き波を足もと
に見つ

目をとちてわが手にもてるいきもののむくろを波に
なけにけるかも

わが投げしにはとりのむくろいづくぞと見れども見
えずくらき波間に

夜の海の波間へとわが投げすてし生き物のむくろ行
方知らずも

秋ふかし

心つかれながむる庭の秋はぎの葉末の露はとどまり
あへず

しぐれの雨日に日にふるに村びとは稲干す日なみか
こちあへるかも

稲刈りの人等あつまり足あらふ川べなつかしき夕べ
なるかも

山もとの村家の屋根に朝日てりいとゆるやかに煙た
つ見ゆ

あてもなくひとりさまよふ時をおほみわが住む里を
よしとしおもふ

もみぢせる大き銀杏樹の下てりにわれ立ちつくす空
あふぎつゝ

もみぢせる大き銀杏樹の葉がくれにこもらひ啼ける
鳥は何鳥

妻のやめるに

妻の病めばせんすべをなみ今日の日の夕たく米をわ
がとぎにけり

われの手にとがるゝ米の鳴る音のそれさへわびし妻
の病めれば

生きの身のいきのさびしさわが胸に泌み來をおほゆ
くらき厨くちやに

ほのほのと釜ゆたちのほる白き湯氣見つゝ物おもふ
くらきくりやに

父がたきし飯ぞとあこらざわめきてけふの夕餉を食
しにけるかも

冬いたる

となりやに餅つく杵のおとぞする今朝をあられの音
のすごきに

町
板葺の屋根仄白く雪ぞらの下にひそまり暮るゝわが

うす暗き雁木の下にうちむれて子等が獨樂まはす冬
は來にけり

日あたりの軒につるせる大根葉の日にしなぶる雪
ちかみかも

風まぜに雪はふり來ぬいざ妻よこよひは早く戸をさ
してねむ

そのかみの國上の山の禪師がことわけてしぬばゆ雪
のふる夜は

吹雪する夜のちまたを一つ二つ消ぬがにいゆく黒き
人かけ

わがもてる提灯の火にほのほのとてらしつゝひとり
あゆむ雪みち

さきに行きし人のあし跡きえてなき白雪の上をひと
りわがゆく

吹きつものるあらしの中にきこゆるなりいづこかちか
く藁たゞく音

馬鈴薯の焼くるにほひす吹雪する夜のるりべにふ
み讀みてあれば

一本の煙草すふまを耳すましよるのあらしを聞きる
たりけり

木の枝の氷柱を折りてたふべつうましうましと子
らは叫ぶも

あれつゝのる吹雪の中にほづかりとまちのあかりはと
もりけるかも

大正七年

二月二十三日（舊曆正月六日）糸魚川町直指禪院に大愚良
寛高首座の八十八回忌法會を營む。會者三十名、別室に遣
墨十數點を展覽す。その折靈前にたてまつりし旋頭歌二首。

君がみあと慕ひていなむみちも見えじな白雪の降り
つみしけるけさのあさけを

あしひきの國上の山のいはま苔みつこの朝はこほり
てそあらむ岩間苔水

冬ごもり

とく起きて藁沓はきて道ふみに朝な朝ないづる雪の
ふかきに

下駄の雪おとすと叩く軒柱その音にさへなれて久し
き

病むあこのみとりをしつゝひさにして夕なる鐘をき
ゝにけるかも

春いたる

雪消えの土なつかしみ子どもらは叫び輪づくり手う
ち足ふむ

ちゝのみの父がやまひのおこたりに心もかろく落の
臺つむ〔父病む〕

あつさ弓春のいそべにいさりをが「おう」と呼びては投
ぐるとも綱

消えのこる崖下の雪のひとゝころ崖の土くろく崩れ
落ちたり

雪消えの田の面に何をあさるらむかもめらあまたむ
れさわぐ見ゆ

ひさにして手につかみ見し畑の土雪解のしめりなほ
のこりたり

山の雪もいつしか消えぬちゝのみの父がやまひをみ
とりせし間に

わが庭になりし苺を今日もかも摘みてまるらす永病
む父に

夏來り父の病つひに癒えず

夏を病む父が床のべ日ごと日ごと寄り來る蟻の追は
んすべなき

追はんすべ避けむすべなみ群れきたる蟻をすりつぶ
すわがたなごこに

ちちのみの父がやまひをみとりつゝわが殺す蟻のい
のちいとしも

蚊帳ぬちにさし來る朝のほのあかりわが父いつか起
きいでまさむ

夏雜詠

佐渡がしまは夕立すらし古志の海の沖べまくろに雲
たちまよふ

夕ちかみ背戸の畑のもろこしの廣葉に風のわたるけ
はひす

大きなる向日葵の花くづれ落つ日にしなえたる雜草
の上に

夜の畑の垣根のうれにほの白くささけの花は浮きあ
がり見ゆ

夕されば濱のをちこち火を焚きて裸の人等むれて涼
めり

くれゆけば手操網曳く小さな舟にもほそく灯ぞと
もりたる

十月二十四日降りしきる時雨のあめにぬれつゝ國上山にの
ぼり良寛和尚が五合庵のあさをこふらふ

あしびきの國上の山の木下路うちもだしつゝのほる
われらぞ

あしびきの國上の山の坂みちにいくたびか聞きしひ
よどりの聲

苔むせる老木の杉の下みちにいくたびわれはたちと
まりけむ

そのかみの良寛さまをまほろしにゑがきつゝのほる
國上の坂道

たちとまりおもへば夢かうつゝかも國上の山の雨に
ぬれつゝ

そのみちのこごしかるこそなかなかにむかしの人を
しのぶよすがぞ

たづね来ていよいよこゝとおもふさへわれには夢の
こゝちこそすれ〔庵の跡にこゝ〕

そのかみのひじりが汲みし岩水を落葉かきわけさが
しつるかも

たにかけの村家のやねゆけむり立ち國上の山はたそ
がれんとす

國上山岩根なづみていかよひしいにしへ人の足あとのなき

十一月五日島村抱月先生逝きたまふ

おもふことおほきにすぎてみひつぎにむかへどわれはおもふことなき

とむらひ人にぎはふ中にまじらひてわれはも何をおもふとすらむ

このわれの夢見ごこちのさめはてゝまことに泣くはいつにかあるらむ

桐苗を植う

ちゝのみの父がかたみと裏畑に霜月われは桐苗を植う

桐苗を植うとわが掘る畑の土さくさくとして音のよるしも

ましろなるをちの山なみながめつゝ桐苗を植う朝の
はたけに

冬いたり顔に亡父をおもふ

ちゝのみの父のみことのしはぶきの聲をきゝたり吹
雪の中に

除夜五首

年とりの酒もりおへてゐろりべに子等とわが待つ鐘
の音かも

ろろりべのぬくもりに子等はうつらうつらるねむり
しつゝ鐘の鳴るを待つ

ろろりべの父が占めてし一の座すにけふのこよひをわ
れのすわりるる

百八の鐘やがて鳴らむその音の一つをきかばねにゆ
け子等よ

大正八年

雪ふかき町の雁本がねの下あゆみきく鐘のおとははるか
なるかも

子を學校へ通はす二首
白妙の雪ふみわけて朝な朝な吾子は學校へ通ふなり
けり

吹きつゝのるあらしの中をいでてゆく吾子が小さき雪
のあしあと

雪中葬送三首

權にのせて柩ひきゆくとむらひの群にまじりてわれ
もゆくなり

柩のせて曳かるゝ櫓が雪の上につけゆくあとはなが
くもつゞけ

白たへの雪つむ上を櫓にのせ音なく曳かれ行くよ柩
は

雪の夜みち

音もなく降りつもりつゝ白雪はわが行く道をかくさ
んとすも

わら杓をはきたる足に踏む雪の鳴る音も今はしたし
くぞある

道の上に高くつもれる雪の上に家並やなみのかけを月のう
つせる

冬晴三首

ひさにして青空を見しよろこびはまづ子等が眼めに見
ゆるなりけり

軒のつらゝ輝きつゝもとくるなり稀に晴れたる今朝
の朝日に

ひさにして風のさわがぬ夜をいねて氷柱のおれて落
つる音きく

春來る

雪どけの水ながれそゝぐ川口にむれるる鳥は鷗なる
らむ

くれちかみ風やいでけむあしひきの山べの櫻みだれ
ちる見ゆ

櫻さくこゝの丘べをわがゆけばいつこか遠く鷄鳴く
きこゆ

砂けむりたちまよふ中をこゝかしこあまたの人はは
たらけるなり〔信濃河口所見〕

わが家の裏に住める老漁夫が藁たゞく音をきよて

海あれの朝はとくより與治兵衛が藁叩く槌の音のきこゆる

繩やたふ草鞋やつくる與治兵衛がこの朝はやく藁をたゞくは

與治兵衛が藁うちながらうたふ唄きけばさびしき松前追分

七月一日はるく大磯より來たまへる安田靱彦氏と共に汽車

の窓より暮れゆかんとする國上の山をのぞみてよめる三首

あしびきの久駕美の山をけふもかも君とならびて仰ぐなりけり

かの坂を明日はも君とのほらむとゆびさせば君も「さなり」とこたふ

まちまちし君を待ち得しよろこびを國上の禪師にいかにかも告げむ

八月六日妻の叔父清水三貞九州小倉に客死すこの報九日わ
がもこにいたる。即日妻上京す。

たくはへし黄金も玉もなにかせむいきの命を叔父に
わがほりす

ひたすらにはたらきつゞけやすらひのそのひまもな
く叔父は死にけり

三人の子等と留守居しつゝ

はじめての母とねぬ夜をいねかねて泣かねど子等は
しばしばめざめつ

末の子のねむりかねたるそばにねてわれも此夜をい
ねがてにする

をとなく朝をめざめてをとなく飯いひはむ子等を今
さらに見つ

妻上京して四日目の夕ぐれちかき頃未なる子元雄にはかに
高熱を發し僅に二十餘時間の病苦の果に息絶ゆ。急を妻に
報じて息あるうちに歸り來らしめむいさまもなくして了ん
ぬ。すべてはたゞ夢のごとし。

母の行き慕ひて泣きてとどめ得ばかゝる嘆きはせざ
らましもの

とこしへの別なりしを何すれぞ母となれとは知らで
ありけむ

母を呼び母を待つだにあるべきをもだしていにしな
れがいとしさ

わが元雄ながこゝちよき笑ひ聲ふたゝび聞かむすべ
なきものか

わが元雄ふた親に似ずしゝふとく心ゆたけくそだち
しものを

何すとして得て來しものぞわが元雄ながたくましくふ
ときかひなは

息たえし二た時前を窓の外のとんほをほしといひに
けらすや

逝きし兒をおもひて

いつしかに虫鳴く夜とはなりにたれわがいとほしの
元雄はかへらす

九月初旬蒲原平野に旅して

つましいねみづほの垂り穂ところせくみのる廣野を
ひとり歩むも

あさ霧のふかくとざせる蒲原のひろぬをひとりあゆ
むさみしさ

姫おんなひとり病めるをさな子荷ぐるまにのせて曳きゆく
田なかの道を

こある田中の家にやどりて

これやこの朝きよめせし廣庭に雌雄の雞らは朝つが
ひすも

冬いたる二首

地におちてむれつをどりつころがりつやがてとけゆ
く玉霰はや

いづこゆか散りし木の葉ぞ町なかの道のをちこちこ
ろがるあはれ

大正九年

初日を拜む

初日かけ拜むとひらくわがやどの二階の窓の風のつ
めたさ

親子四たりが頭ならべてひむがしの空をし仰け日は
いまだいです

あなかしこ親子四たりが頭ならべ拜まんと待つ初日
の光を

いまひとり元雄のあらぬさびしさをおもひはいでつ
言にいだし得ず〔元雄は去年の夏うせし末の子なり〕

と見るまに火打の山のいたゞきよくるめきいでぬ大
日輪は

あなと叫びわがをろがめば妻子らも手うち初日をを
がむなりけり

雪踏み

學校へゆく吾子のためわが踏みし雪の上の道はほそ
くもつゞけ

わがつけしわら沓のあとのほそみちを吾子はいでゆ
くその雪みちを

ひとしきり吹雪おこりてうづまけば吾子はちゞかむ
雁木の下に

子等あまたよびかはしつゝ雪みちをおくれさきだち
ゆくがいとしも

雪にうもるゝさびしさを

門のべをゆきかふ人のあし音のきこえずなりていく
日かも經し

門のべをゆきかふ人の下駄のおとをふたゝびきくは
いつにかもあらむ

都なる犬塚松之助の死をかなしみてよめる六首

かゝることあらむとてかもわがこのごろ頻に君にあ
ひたかりしは

をりを得てるなかにうつりのびのびとくらさまくせ
ちにねがひし君はも

まづしさにまげざる清くすなほなる心もちて君は
生きたりき

まづしきを貧しきと知りて生きながらすさまぬ心君
はもてりき

おくられし鶉もチャボも生きてあれどおくりし君は
今はあらぬかも

この里にふたゝび君が來しをりにみたびは來むとち
かひけらずや

良寛和尚八十九回忌に

われながらうれしかりけり朝にけに君がこの世にま
せしをおもへば

あづさ弓春のちまたにこどもらと毬つく法師いまは
あらなくに

かまはらのひろぬのおくの森かけのきみがいほりも
いまはあらなくに

あさにけにきみがくみけむ苔みづのそれさへいまは
湧きもいでなくに

きみがためいづれをか摘まむ春あきに咲き散る花は
さほにあれども

春淺き日

うちむれてつばめぞ來つるたゝなはる高嶺はいまだ
雪のしろきに

春の日のかゞよふ中にこゝかしこちさき羽虫のむれ
さわぐ見ゆ

あさに生れゆふべに死ぬる蜉蝣といふ虫にかもあら
むこれの羽虫は

妻と二人流行感冒に病み伏して

子等はみなよそにあづけつ心なほ安からずこやる此
の二人あはれ

子等がことおもへばいまだ死なれじと妻がいへばわ
れも然りとこたふ

熱たかみ苦しき夜半はわれも妻もさすがに深く打ち
もだしつゝ

やみこやりわがありし間にわが園のいちごの花もさ
きにけらしも

孟蘭盆八首

赤く青くいろどられたる小さなる盆提灯を子らに買
ひてやる

去年の今日死にし元雄も去年の昨日盆提灯を買ひて
もらひき

ちひさなる提灯もてる子等をさきに立たせてぞをが
むうがらの墓を

をどりのうた今宵も遠くきこゆなり月かけ見んと窓
にるよれば

をどり見にわれもゆかばや久方の月の光にてらされ
ながら

秋近き頃

ひさかたの天の川原は夜をふかみいよさやかに見
えにけるかも

ひさかたの天の川原の末にして黒くいくつかならぶ
山々

浪のおとのしづかなる夜は砂濱にねころびるつゝ虫
きくわれは

しづかなる夜のおほ海にむかひ居てきく虫の音は遙
けかりけり

ほそほそと今年も虫は鳴きそめぬすぎにし吾子のか
へり來なくに

うら畑のもろこしきびの葉のゆれにきらめく月の照
りのすゞしさ

若桐のひろ葉のかげのくらければ晝もをりをり虫鳴
く裏畑

垣に咲くささけの花は月をきよみ土に影おとすちひ
さき影を

月きよき村のをちこちほのほのともろこしきびをあ
ぶるにほひす

もろこしきびあぶるにほひをかぎながらそとろにお
もふ幼き頃を

あなうらの砂のつめたさこゝろよみ月夜の濱を下駄
ぬぎてあゆむ

沖べなる烏賊釣舟がともす火の夜ふけていよゝさび
しくは見ゆ

よもすがら働く身にはしのゝめの光いかばかり待ち
どほしからむ

月きよき夜の砂はまをゆきかへり拾ひてはすつる石
のいくつを

いつよりかをらすなりしぞふと氣づき見あぐる空に
燕は見えず

十月十七日御前山村さいふにいたり雲臺寺さよふみ寺にやぶる

年ふりし杉の木立のかけふかく鳴る鐘のおとはをこ
そかなれや

見はるかす谷のをちこちもみぢせる森より白くのは
る夕けむり

夜をふかみ笈をおつる山みづはこゝろにふかくひど
くなりけり

さよあらしいたくな吹きそ稀にわが山深く来てやど
るこの夜を

あかときのねざめに雨のおとすなり山のみ寺の秋の
ふかきに

屋根をうつ杉のしづくの音しけみねざめのひまをさ
びしみにけり

とのもゆく馬の足音鈴のおと夜はほのほのと明けて
ゆくらし

かけす鳴く松の老木の木のまより見おろす谷の朝の
しづけさ

苔むせる石たゝみ道ふみ鳴らししめやかにたどる杉
の森かけ

ほとけます老木の森のここかしこ椽しらの實はおつる音
のかそけく

ここにしておわがひらふ櫟の實はもよし家なる子等に
もちかへるべく

山にあそびて

すゝきの穂わけわけのほる山みちにきけばさやけし
山がらの聲

すゝき原さやらさやりに秋風の吹きわたる見つゝの
ほる山みち

すゝき穂のゆれのまにまに赤あきつ亂れたつ見つゝ
のほる山みち

せまり來る闇のおくがにわが辿る道は一すぢほの由
く見ゆ

ともしびははしきものかも夕ぐれの山路に村のあり
か知るべし

汽車中所見

頸城のや砂高がねに新雪の白きをあふぐ汽車のまどより

みこしぢの頸城のひろぬ秋をふかみかしこにこゝに焚火せる見ゆ

大きなる山をうしろにひかへたるおそ秋の村はやすけくし見ゆ

信濃路の旅

みすゞかる信濃の國に越え來ればすでにましろく霜のおきたる

高はらのをちこちの村もみぢせるボブラ並木のみ浮きあがり見ゆ

秋ふかみをちこちの家に豆たゞくおとのゆたけくきこえけるかも

みだれちる楊の黄葉をあびながら千曲の川の流るゝ
を見つ

秋ふかき千曲の川の川ぎしは葦の枯穂に風吹きやま
す

しなのなる千曲の川の岸に来て静にきくは秋風のお
と

しなのなる一茶が里も冬をちかみいやさびしくも見
えにけるかも

高はらの畑中のみち夕まけてわが行くかたにむれと
ぶ小鳥

冬いたる

雨あられ日にけに降るにわが庭の木の葉いつしかに
おちつくしたり

青ぞらを見ぬ日をおほみ人々の目いろこのごろにぶ
れるごとし

目のいろのにぶれる人等薄ぐらき家にこもらひ焚火
す日に夜に

稀に晴れし青空は高くかつ廣し打ちあふぎ見るにま
なこまばゆし

冬ざれの濱の砂畑ひとゝころ玉をむすばぬ玉菜のみ
青し

ふゆざれの濱のはたけや柴垣の豆のかれ蔓風に鳴り
つゝ

來む年も濱ばたけには豆植ゑむ子等が好めるささけ
の豆を

初冬の晴れたる朝の磯はまのところどころにもえの
こる焚火

焚きすてゝ沖へいでゆきしいさりをもはるかにや見
む磯の焚火を

朝の磯焚火ぞもゆるそこにこゝにあたる人なみさび
しくぞ燃ゆる

焚きすてられ風のまにまに燃えあがりはたもえほそ
り火はなほも消えず

朝つく日さしてを來れど磯濱の焚火はなほも消えや
らぬかも

石器時代の遺物をひろはむさて冬枯の丘にのぼりて

霜がれの茅原萱原わけのほりまれにわが見つ冬の國
原

まはだかの桐の若木はすくすくとむらがり立てり丘
のはたけに

冬されの丘の畑中ゆきかへりひとりわが拾ふ土器の
かけらを

いそのかみにしへ人のもちしてふ土器のかけらに
のこる指あと

ある朝

電燈の光おもむろにうすれ行きほと消えて朝となり
けるかも

大正十年

大五十年

莓を摘む

わが園になりし莓のはつなりをもろ手にもれるけさ
のうれしさ

朝つゆにぬれてかどやくくれなるの莓の玉にしく玉
ぞなき

朝な朝ないでゝわがつむわが園の莓の玉は神のたま
もの

露しけき葉をかきわけて朝な朝な子等とわが摘むこ
れの紅玉こうぎよく

藏に秘めむほどの寶はもたねどもこの紅玉こうぎよくぞ年々に
多き

きうり

雲おもき五月雨空の下にして胡瓜のつるは日に日に
長し

黄色なる胡瓜の花の咲く頃のはたけはよろしわが家
のはたけ

耳しひさなりし人におくる

かしましき世の雑音ざつおんを聞かせじと佛は君が耳ふたぎ
けむ

いやさとき心の耳に君がきくちよろづの聲はわれも
きゝたし

秋ふかき頃

あらしのおとはたとやみたる明けがたの静けさのそ
こに虫は鳴くなり

朝をさむみ起きがてにしてわがひとりきくこほろぎ
の聲のかそけさ

朝ごとに踏めどあかぬかも白玉のつゆにぬれたる庭
の黒つち

朝のそら仰ぐとしつゝ見いでたり屋根の小草の秋の
姿を

朝きよめわがする庭の木々に来てうたひつあそぶ親
子の雀

となり家の軒につるせる粟の穂にけさもさしたりあ
まつ日かけば

耳すまし聞けばさやけしおのづから草葉ゆおつる朝
つゆの音

しめりたる朝の庭つち踏むことも慣れて久しくなり
にけるかも

山にあそびて

小松原わけのほり来て秋草の花さく丘にいでにける
かも

稲架いねかの目にたゝぬ村はなかりけりこれの丘べに今日
来て見れば

萩桔梗むれ咲く丘にのほり来て裳裾につける草の實
を捨つ

こゝだくもつきたるかもよ裾に袖にぬすびとはぎの
青ぐろき實は

ましろなる花さきつよく蕎麥畑に風ふけば見ゆる赤
きその莖

ましろなる花におほはれしそばの莖のほの赤き色の
その莖よあはれ

町中の抜け道にさへ秋は咲くみぞ蕎麥の花犬蓼のは
な

天つ日のさしそふ見れば高き木の梢にも露はこゝだ
溜りたり

丘の上の尾花が原やその奥に道あるらしも馬の鈴き
こゆ

道のべの野茨の實の赤きにも秋のけはひはしるけき
ものを

十一月十四日新潟にて

初冬の新潟こそはさびしけれ柳の枯葉まちに散りつ

にひがたのよろづよ橋ゆわが見たり久駕美の山の冬
のすがたを

空くらき越のひろぬのかたすみにうづくまるごとし
久駕美の山は

雨風のすさぶが中を大川の舟にほそほそ火は焚かれ
たり

信濃川岸の葦原立枯れてゆききの舟をかくすさびし
さ

冬いたる

窓をうつ霞の音をこゝろよみいく時を経ぬ火にあた
りつゝ

ひとりゐてきけばさぶしも雪の日を土間に餌あさる
にはとりの聲

ほのかなる曇玻璃戸の雪あかり物思ふによしひとり
静かに

雪あかりほのかなる部屋の爐のはたにひらきそめた
る鉢の白梅

雪あかりほのかなる部屋のぬくもりに咲き散る花を
見ればさびしも

あられふる濱の松原夕まけて舟ひきあぐるふな人の
こゑ

砂濱の砂のくほみにたまりたる霞たふべついさり
を
たちは

あられふる日暮れの磯になげだされ値ぶみさるゝは
何魚ならむ

しんしんと雪ふるよさりるろりべに子等と薯焼きて
たうべけるかも

子等が讀むお伽ざうしのは紙の色濃き繪さへさび
しこよひは

みかんの皮むく指さきのほのかなるつめたさはよし
夜のこたつに

夜のこたつの上にならべてわが置きし蜜柑にしぼし
見いりけるかも

浪のおときゝつゝいつかねむりけり年のおはりのよ
るの炬燵に

大正十一年

二月三日親不知の嶮に近き勝山トンネル口にて大雪崩の爲に列車粉砕され乗り合せたる除雪人夫九十名惨死をこぐ、重傷者又十名あり。大部分は社會奉仕の名の下に出動したる附近町村の青年團員なり。その惨状目もあてられず。

肉やぶれ骨くだけたるむくろいだき泣きづれしぞう
かうからやからは

食ひがけの餅をそのまま握りたりしむくろもありき
あはれそのむくろ

何すれぞかく大きなるいけに忍のむなしく雪と消え
はてめやも

血にみちし雪さへいつか消えはてゝ春はほのほのめ
ぐり來むもの

二月下旬病床にこもりぬてよめる

今日もまた病の床にこもりつゝ吹雪の音をきゝくら
しけり

やみこやし聞けばかさびし下駄の雪門へにおとす人
の足おと

今日もまた女芝居のふれ太鼓が吹雪の中に鳴るよか
そけく

雪ふかきこの里にまで藝を賣ると來しはいかなる群
にかもあらむ

夕餉たく香ほのかに病みこやるわがまくらべにかよ
ふ静けさ

雀に餌をやる

朝な朝な門への雪の上にかく飯いひのこほれにあつまる
雀

貧しかるわが家の飯のこほれをだに來て待つ鳥のあ
るがうれしさ

良寛和尚をおもひて

そのかみの禪師ぜんしをおもへば雪の夜のねざめのひまも
さびしくはあらず

涅槃會の朝

ひさにして晴れて静けきこの朝を涅槃會の鐘は鳴り
わたりたり

やみつかれ起きがてにしつゝ朝床にきくはかしこき
涅槃會の鐘

四月十一日出雲崎良寛堂起工式を祝ひて

あつさ弓春のよき日のけふの日に高くもひゞく斧の
音はも

高らかに鳴らせたくみらけふの日の斧のひゞきは常
ならなくに

春たけなはなる頃

若草のもえのあかるき廣庭に餌あさりあそぶ雛のや
すけさ

ぬば玉のさよのねざめにむら蛙遠鳴く聲をきゝにけ
るかも

若葉かけわが汲む水のしたゝりは碧玉へきぎよくなして地にこ
ほれつゝ

若葉せるボブラ並木は夕ちかみ木末は風にゆれやま
ぬかも

若葉せるボブラ並木のかげに立ち仰ぐ高嶺は雪いま
だ白し

わが仰ぐ夕ばえ空にうかぶ雲の歩みは速し風いづら
しも

まごやしの花咲きみてる廣庭にまひるを獨よこたは
りつゝ

よこたはりわがある庭に咲きみてるまごやしの花の
さびしきにほひ

よこたはりわがある庭のまごやしの葉のつめたさの
身には親しき

いつしかに夏は來らしも濱畑に豌豆の莢のふくらむ
見れば

豌豆の莢をつみつゝ濱畑にながむる海のはつ夏のい
ろ

豌豆のなよかなる蔓を葉を花をゆるはさやけき朝の
海かぜ

海かぜをこゝろよみかもわが負へるをさな子も深き
息をぞすなる

花あかき夾竹桃と實のなれる無花果の木とならびて
立てり

露の葉のひろ葉のかけにほの白くかくれて咲くはど
くだみの花

六月十七日浮田、藍野、松井、松野の諸友と出雲崎にあそぶ

初夏の青葉にそゝぐ雨の音をさびしみつゝも越ゆる
峠路

峠路をわが越え行けば霧雨の中にほのほの大うみは
見ゆ

山の端にきりのこされし一もとの大き松の木を皆あ
ふぎ見たり

わが慕ふ人ゐますがに心せきいくたびか越えしこの
峠路ぞ

月見草

すな山の松のはやしの下かけに晝をしほめる月見草
の花

北うみの砂山かけの宵々に咲きのさびしき月見草の
花

宵に咲きあしたにしほむ北うみの砂山かけの月見草
の花

月見草咲きのさびしき砂山を越えてきこゆる浪の音
かも

ホプラミ蟬

窓の外のホプラは風にもまれつゝ幹にはやどす蟬の
いくつを

初冬の頃

わが辿る丘の小みちは風をあらみ木々の枯葉の散り
やまぬかも

ちりやまぬ落葉がたつるかそかなる音のさびしきあ
さけなるかも

朝そらは澄みわたれどもわがいゆく道は落葉の音ば
かりして

枯れふして路ふさぎつゝあないとし草はことごとく
實をむすびたり

冬されの丘のはたけの夕まぐれ人ふたりありて火を
焚ける見ゆ

冬されの丘のはたけにもゆる火の烟は低く地をはへ
るかも

夜をさむみいねがてにしてわがきくは裏の仁助が白
すりの唄

年貢米納めしあとの食ひしろの糲をすりつゝ仁助は
うたふか

まめ男仁助がうたふ糲すりの唄をよなよなきゝてさ
びしも

雨あられ降る日をおほみ初冬のはたけの土は乾く間
もなし

冬
さ
れ
の
丘
の
は
た
け
の
一
と
こ
ろ
青
き
は
春
を
待
つ
麥
な
ら
し

大
正
十
二
年

大五十二半

冬の夜のさびしさにゐてひとりわが障子にうつし見
たりわが影を

橋ひきて牛ころしらがゆくあとに一すぢながくつど
く血のあと

夕ぐれのちまたの雪にのこりたる牛の血の痕踏みに
けるかも

磯によりし流れ木ひらひ日にほして爐に焚き冬をこ
もる人々

たゝなはる眞白群やま雪の山ひさにしてわが見たり
青ぞら

さんらんと輝きつゝも天つ日に軒のつらゝの溶くる
間を見つ

白雪のうづみのこせる軒かけにこはめづらしき露の
臺かも

かしらならべ軒かけせばき黒土に露の臺はも出てる
たりけり

病みて

やみこやりわがありし間にこの冬もはやきさらぎと
なりにけらすや

やみこやりあさなくにわがきくはとなり家に飼へ
る鶯の聲

まどを打つ吹雪の音にまぎらひてけさも隣の鶯はな
く

右腕の注射のあとのいたき夜のねざめにわびし海鳴
りのおと

やみつかれねむる心のやすけさをたまたま知りぬ衰
へけらし

くすしがり薬もらひに吾子はゆく吹雪の中をくすり
もらひに

あれくるふ吹雪の中をいとし子の貰ひ來し薬ぞきか
であらめやも

春いたる

ほの赤き芍薬の芽は雨にぬれ見る見るうちに伸びゆくがごとし

都より友の來れるに

都よりよき友ひとり來りたり春のまつりの夕ぐれがたに

都より來りし友とおまつりの祝ぎ酒を共にくみにけるかも

良寛の話をしつゝ都びとと汲みかはす酒の味のよろしも

語りつゝ友とし聞けば浪のおとしづかなるかも小夜のくだちに

子とあそぶ

あたゝかき春のあさけの砂はまにをさな子とわれと石投げあそぶ

をさな子の投げたる石もわが投げし石も同じく海に
おちたり

砂はまの中をうねりて流れたる小川の水もぬるみた
るらし

大そらを燕はかけり軒端には雀巢をつくる永き春日
を

わか松のほそき葉末の一つ一つたまりて春の雨ぞ光
れる

わか松の新芽のび立ちほそ雨にぬれつゝぞるるなが
き春日を

久しぶり訪ひ來し友が裏庭の杏の花もちりにけるか
も

春雨にぬれて光れる瓦屋根にちりて白きはさくら花
かも

新らしき芽ぶきを待ちし柏木の枯葉もいつか散りは
じめたり

新らしき芽の出るを待ちて散るといふ柏の枯葉見れ
ばさびしも

春のくれ方富山なる友が家にやどりて

旅にしてきけばかさびし行く春のまつりの朝の花う
りの聲

旅にいでゝをどろかれけりいつしかに桐の花さく頃
となれるに

初夏の頃

大そらを静に白き雲はゆくしづかにわれも生くべく
ありけり

眞白雲しづかにうごく空の下桐の林に風わたる見ゆ

久しぶりに電車に乗りて

ひさしぶりに電車にのれば笑止やな心をぢする我と
なりゐたり

能登七尾港にて

目さむればほのあかるめる空の下に靜に海はひらけ
るたりけり

朝ひらき能登の入江を漕ぐ舟の櫓のおときこゆあな
たこなたに

とき色の蚊帳ぬちにしてねながらにけさをわが見る
海の靜かさ

何といふやすらけき姿ぞ能登の海のあしたの磯に釣
する人は

和倉温泉にて

夕ちかみほのほのかすむ能登島の半の浦村に灯のともる見ゆ

松かぜの高さやかなる袖が江のいそ山かけのつゆ草の花

和倉の温泉宿の裏畑に大きく咲けりかほちやの花は

磯山の松の林の繁ければあさにゆふべにひぐらしは鳴く

沖つべの島の林も夕さればかなかな蟬は鳴きてあるらむ

秋近し

濱畑の瓜の枯葉に音立てゝ秋らしき風は吹きそめにけり

濱畑に枯れ枯れのこる瓜の蔓にぶらさがりたるへほ
瓜よあはれ

久しぶり胡麻のはたけに胡麻の實のなれる風情を見
たりけるかも

十月二十日南魚沼郡浦佐の里にて

山奥の毘沙門堂の丸柱なでつゝ秋の深きをおほえつ

秋ふかみ山のみ寺の石だゝみわが踏む下駄の音のさ
やけさ

八海のみねにたゞよふ薄雲をながめつゝ今朝の飯は
みにけり

十一月末の一夜山もこの村に住む友をたづねて三首

さよふけの君が門べにほの白く八つ手の花はさき
たりけり

月の夜のさよのくだちに水ぐるま音かそけくも廻り
るにけり

君が住む里はさびしも宵ながら人のあおとをきかぬ
ものから

冬來れる頃

いつしかに木の葉おちつくし清崎の丘あらはにも見
え透きにけり

清崎の丘のはたけに青々とこの冬もまた伸びたりな
まは

麥畑の青きが上にふるみぞれかつきえゆきてつもる
ともなし

大正十三年

吹雪の日郵便配達夫南國よりの珍らしき贈物の小包をさゞ
け来る
雪あかりほのけき部屋にながめけり南國ゆ來し文旦
の實を

南國ゆ來し文旦の包み紙は吹雪にぬれてるたりける
かも

窓のちより霞のふるを眺めて
がらす戸の棧きんにふりたまりつぎつぎにあらはとく
る部屋のぬくみに

藁火

藁灰をとると藁焼く砂濱の藁火をかこむわれとこどもらと

藁火焚く濱の朝けの静けさにこどもらもわれもひそまりるたり

こもりぬ

がらす窓をすかして見やる廂屋根の雪の上なる雀の足あと

鉢植の薔薇のつほみのしづしづと開くを見たり冬ごもる部屋に

冬ごもる部屋にめづらしくさせる日の光したひて薔薇はひらくか

清崎の丘にならべる地藏尊も雪をかつぎておはすらむかも

庭の木にたまりしづるゝ雪のおとをねざめにきけば
さびしきものを

故しらにこよひはさびし門のべの雪ふみわけてとふ
人もがも

二月十五日

淡雪のふりの静けきこのあさけ涅槃會の鐘をことし
もきゝたり

ねはん會のかねのひゞきを幾度かわれ此の里にきゝ
にけんかも

虫けものあまたあつまり嘆かへる涅槃の像を拜まぬ
ひさし

二月十九日吹雪を冒して三島郡島崎の里にいたり良寛和尚
終焉の家たる木村邸にやぶる

雪ぐものとざしをふかみいやひこも國上の山も見え
わかぬかも

雪あられ窓うつ音をきゝながらいねもかねたりこれ
の一夜を

あくる朝良寛和尚の墓に詣つ

白たへの雪ふみわけて島崎の良寛の墓にまうでける
かも

手向くべき花もあらぬかも白雪にうづもれてあるこ
れのみはかは

三月下旬信濃諏訪に赴く

雲くらし吹雪の國ゆ來しわれにまばゆきかなや此の
國の空は

山一重こえしばかりにこの高はらすでにうらうら春
めきてあり

しなのなる諏訪のやしろの裏山や鳴きかはす島の聲
のさやけき

春をあさみいまだ芽ぶかぬから松の林を越えて大き
日は沈む

あさゆふにいみじく變る諏訪のうみの水の面の色を
あさゆふにめでつ

諏訪のうみの岸べの里に湧きいづる湯に浸りつゝ雨
を聴きたり

春あさき頃

春あさみ刈田のまゝの田のおもに薺は白き花さかせ
たり

田打ち日のちかつきにける田のおもやもえのあかる
きあら草の色

おまつりの餅つく杵の音きゝつゝしたしむ朝の床の
春寒

わけもなく春のあしたの砂はまにかけずりまはる子
等はわが子等

つゝましく臉をとぢぬ丘の上に春日をあびてねころ
びながら

なつかしき友にあふ心地大そらに今朝をはじめてつ
ばくらを見つ

ひばり鳴く頃

ひばり鳴く丘邊の小みち春をふかみたんほほの實の
ほゝけとぶしきり

ひばりの聲きくと仰ぎし大そらに心はとけてゆくへ
知らずも

ぐみの花のさきのさびしき姫川の川原にひとりひば
りを聴くも

晩春初夏

蛙鳴く田中の道をあゆみつゝ雪のたかねを仰ぎける
かも

落葉せるボブラ並木の葉がくれに鶺鴒は鳴きかはすい
ともさやかに

出そろひし麥の穂波にかゞよへる光は風にゆれやま
ぬかも

去年の穂の立ち枯れのこる萱原に萱の新芽は一面に
青し

月夜よみ若葉かへでの黒き影のさゆるゝ土の踏み心
地よさ

土のにほひかけばさびしもおこし花の散りしける庭
に草むしりつゝ

都草の黄なる花さく丘のみち水鶏の聲をけふ聞ける
かも

水鶏の聲佇みてきゝぬ丘の道鬼いたどりの繁きが中
に

何ごとか語らふらしきもあさ風にふれあひゆらぐひ
なけしの花

露の葉のひろ葉にそゝぐ雨の音を心静けみつばらに
ぞ聞く

おもひわびわが迎る丘やいつしかに草のみどりの夏
めきにたる

水無月拔

水無月のみそか日をよみ谷川にくろ髪洗ふ村の娘た
ち

をとめらが洗ふ黒髪は谷川の流のまゝになびきゆら
らける

八月はじめ出雪崎にて

闇ふかき沖べにならぶいさり火を旅にして今宵しみ
じみと見つ

この里に良寛和尚もをりをりは沖のいさり火をなが
めましけむ

良寛堂に詣つ

眞夏日の良寛堂の軒かけに雀はあそぶおや子のすゝ
め

眞夏日の良寛堂の裏庭に乾しひろけられし青萱の
ほひ

八月越中に赴く汽車中にて

一つ家に遊女とねたるそのかみの芭蕉をおもふ汽車
ぬちにして

まなつ日の息づまるごとき汽車ぬちにしみじみ見た
り働くボーイを

早稲^ヤの穂の出そろひ風になびく見れば夏もいつしか
ふかみけらしも

黒部野や日てりきらへる西瓜畑に大き西瓜はやすけ
くころがる

能登小木にて

眞夏なほ鶯鳴けり能登の國小木の港のいそ山かけに

ほととぎすしきりに鳴きて眞夏なほしめやかなれや
能登の磯山

石きりの鑿のあとあまたのこりたり能登半島の磯の
きりぎしに

鑿のあとあまたのこれる石がけをなでつゝさびし旅
の磯曲に

九十九灣舟遊

ほの暗き入江のおくに鹽を焼く煙ほそほそ立ちのほ
る見ゆ

鹽たきがともすともしか夕ぐれの入江のおくに小さ
く見ゆるは

こもり江の磯山かけにたむろせる市ノ瀬村に兒の泣
く聲す

海上所見

眞夏日の光かゞよふ岩の上にかもめはならぶあまた
のかもめ

岩の上にあまたならべるかもめらは皆同じかたに向
きてゐるかも

初秋

裏畑の隅のくほみににらの花はこの秋もまたつゝま
しく咲けり

裏畑の隅のくほみにほのしろくむらかり咲けるにら
の花はも

わが吹きし煙草のけむの行末を今朝しみじみと眺め
たりけり

裏畑の垣に朝咲く木槿ばなの數少なにもなりにけ
るかも

晩秋雜詠

黄ばみたる廣田のあなた雨にぬれトタン屋根おほき
わが町は見ゆ(丘をさまよひて)

風をよみ落ちし櫻のわくら葉はいともやすらげく地
にとどまりつ

桐畑のしなび黒める葉のうれに桐の實しるく目立ち
そめつゝ

ほゝけたる尾花が原をてらす日の日ざしよわくもな
りまさりつゝ

蓮臺寺の丘の上なる友が家も見え透くまでに落葉せ
りけり

家ぬちによべまで鳴きしこほろぎの今宵は鳴かず死
にゝけむかも

小春日所見

小春日の丘の畑ゆたつけむり吹く風をなみ高くのほ
れる

しみぢせる櫟林のかげよりも煙はのほる火を焚くら
しも

寫生すと刈田の畔にうづくまり雪の山見る學童の群

ましろなる高山なみを仰ぎつゝこの學童等何おもふ
らむ

雪白き山に見とるゝ子等見ればわれもむかしのおも
ほゆらくに

小春日の田中の道や今朝を遇ふ人毎に重く大根おほねを負
へる

刈りとりて幾日もたゝぬ稻株のひこばへまたも穂を
はらみたり

病みて

病むわれに見せなんものとおのが畫を吾子は手づか
らピンにてとめつ

子が描ける色あざやけきクレオン畫見つゝさひしも
病の床に

子が描きしはいづこの家ぞその家の戸口はかたくと
ざゝれたるも

冬いたる

今宵ふる雨の音わけて身には泌む夜ふけて雪となら
むとすらむ

焚きすてゝ田人は早もかへりけむ刈田の畔に火のみ
もゆるは

焚きすてられ刈田の畔にもゆる火のきえむとしてや
またもえあがる

雪もよひの空にまひあがりむら鷗風にあふられちら
ばれりあはれ

ちりぢりに風に吹かるゝ群鷗あつまらんとしてはま
たちらばれる

爐に焚ける爪木にまじるじみの木の其枝につける赤
き實よあはれ

大正十四年

大五十四平

冬雜詠

久にして晴れたる今朝を櫻の芽はみに來て鳴く鶯の
聲々

櫻の芽はまるゝ惜しみ追はんとして聞きほれてるつ
うそ鳥の聲に

うそ鳥がつひばみこほす櫻の芽あまたちらばれり根
もとの雪に

末とほく山もうねりつゞきたる雪の上なる一すぢの
道

山もとのほそき雪みち小さなるゴム靴のあともしる
くし見ゆる

火を焚きつゝ吹雪もよひの磯のべに父の舟まつ海士
が子どもら

がらす戸に吹きつくる雪のおときゝつゝ朝の雑煮の
餅やくわれは

湯氣のたつ朝の味噌汁冬となりいよいよまし朝の
味噌汁

あつき汁ふきふきすゝるいつたりの親子したしもよ
冬の朝餉時

背戸畑の雪をぬけいでて枝かはす柿の木も桐の木も
みな裸なる

山はさぞ雪ふかゝらむ背戸畑に山の鳥あまた来て鳴
くきけば

雪けむりうづまく中をマントかぶり子等は學校へか
よふなりけり

向つ家の屋根ゆ吹きおろす雪けむり今し出でゆきし
子の姿見えす

良寛忌を營みつゝかの五合庵をおもふ

このごろはかの古いほも白雪にうもれてぞあらむと
ふ人をなみ

雪の上にわづかに見ゆる立枯の萱の穂先は風にゆら
けり

もくもくと煙はのほる火葬場の煙はのほる雪の中よ
り

雪もよひの灰色空の一ところほのにあかるし日のあ
りどならむ

汽車中所見

杉の葉に降りたまりたる白雪はそのまゝこほり落ち
んともせず

雪の野のあなたこなたにむらがりて裸の木々は静も
り立てり

雪ふかき山のなぞへの櫟林この林のみ枯葉をつけた
り

櫟林の枯葉のいろの雪に映え黄色にあかるしこゝの
谷あひ

雪もよひの夕空低く野を蔽ひをちこちの村に灯ぞと
もりたる

栃尾町にて

雪ふかき栃尾の町の薄ぐらき雁木うれしもよ古風の
雁木

雪ふかきこの町に入りてまづ聞きしは機織る梭の音
にぞありける

ふかふかとおもれる雪にこもらひて機織る音は鈍く
しきこゆ

ある家に招かれて

酒つくる男がうたふ歌の聲きゝながらのむこれのう
ま酒

松の葉をこまかにゆする春めきし風あるはうれし雪
のふかきに

見附町附近

雪の野にむらがり立てるはだか木の桐の林に小鳥は
鳴けり

雪の野に立てる裸の桐の木の梢にのこる桐の實あま
た

日がさせば雪のおもてにおのおのおの裸木は影をお
としつるかも

たよなはる雪のむら山天つ日の光まぶしみ仰ぐに堪
へず

かりそめの遠出なれども夕されば旅の心になりにつ
るかも

つがふ雀

山が庭のわか葉かへでのかけにして雀しきりに朝つ
がひすも

わか葉かけつがふ雀を今朝見つゝ心あかるくなり
けるかも

汽車中あめりか婦人らしきが二人あり

車窓に倚りつかれまどろむ外つ國のをみな
の寝顔しみじみわが見つ

とつ國のをみな二人もをりをりは外の景色に見入
なりけり

とつ國の旅のをみなの上ぎぬのあせし更紗の色
のさみしさ

信濃への途中國境のほさりにて

しなさかる越と信濃の國ざかひ今しうつぎの花ざ
かりかも

丹つゝじの咲きまじりたる青葉かけを北と南へ水
わかれ流る

豊野より中野に赴く自動車に乗りて

打ちつゞく穂麥畑のはてにしてゆるゆる廻る水あけ
車

珍らしみわが見てあれば水揚げの車はとまる風のと
ぎれに

日に光る丘のなぞへの麥畑の穂波をわけてゆく人の
ある

麥畑の穂波わけわけゆく人はをりをり佇む何か見る
らし

わが乗れる自動車があぐる砂けむりの穂麥が上を匍
ひゆくあはれ

湯田中温泉

河蛙なく朝の川原にほのほのと出湯の湯氣はたちの
ほりつゝ

アラタナス二首

鈴懸の廣葉のかけにひそやけく鈴かけの實はなりさがりたり

ひそやけく葉かけになれる鈴懸の實は風にゆるゝ其の葉と共に

五月雨頃

日ならべてふるさみだれにぬれそほち葉堆はならぶ丘のはたけに

桐畑の桐の廣葉にふる雨の音をつばらにけふきけるかも

白枯れてはたけにのこる豌豆の蔓をし見ればまさに夏なり

馬鈴薯のましろき花は雨にぬれ下を向きたり黄色の葎も

いつしかに土手のつばなは穂にいでつその穂もいつ
かほゞけたりけり

九月初旬村杉温泉にて

老杉のむら立つかけの湯の宿のねざめすがしき水の
音かも

岩間もり落ち来る水に髪うたす裸女はだかめんなのあらはなる姿

岩間もり流るゝ水に髪浸しうつゝなきかもをみな子
たちは

岩水に髪洗ふ女があらはなる二つの乳のふくらみの
よさ

赤松の林をわたる風のおとをらしづめてきゝ入りに
けり

赤松の林のかげのほのあかりさまよひにつゝ我も身
に感す

五頭登山者の群に加はる

うちむれてわれらがいゆく五頭がねの麓の道は濡れ
てつめたき

一つらにならびていゆく登山者の列はみだれず道を
ほそみか

先達が吹き鳴らす貝の音をりをり霧にこもらひ鳴り
にけるかも

ひやゝけき霧にぬれつゝ穂すゝきのさやぐ坂路にわ
れもぬれたり

先にゆく人が搔きわくる穂すゝきのはねかへるをば
われもかきわけつ

をりをりを見上ぐる方に人かけは霧の絶間ゆほのけ
くし見ゆ

ふと仰ぎ霧をすかして山上さんじやうにいこふ人影をつひにわ
が見たり

山上の人等よろこび叫ぶらし霧にこもらひどよめく
人聲

前後左右灰いろの霧そが中に浮島なせりわがありど
ころ

のほりつめ立ちてし見ればおのづから高きをおほゆ
霧の中なれ

のほりつめ息づくたゞち霧雨に濡れたる草に身をば
投げたり

もだしるるわれらが吐ける息のおとのほかに音なし
山の静けさ

と見る間に霧の一ところ光さし向つ嶺呂こそ浮びい
でたれ

むかつねる現ると見るやつぎつぎに浮びいでたり高

山低山

流れつゝ消え下りゆく霧のさまを夢かとはばかり眺め
たりわれも

雲の間ゆもるゝ日すぢにところどころ白く光るは阿
賀の流れか

ところどころ廣野の上になぎれ浮く雲はこゝよりゆ
きし雲かも

秋來る

今朝をふと秋らしき風の吹き來るや百日紅はまづ花
ちらしたり

百日紅のあかくこまかき花びらは風にちらされ地を
いろどりつ

草の葉のゆらぐ姿に見とれつゝ今朝しめやかに齒を
みがきたり

心つかれながむる空のさやけきに姿を見せず鳴く鳥
のある

丘の會吟行

ちゝこ草の花ほの白く咲きつゞき川原の道は見えも
わかなく

川上の電化工場ゆみだれ湧く烟はうつる川のながれ
に

初秋の光あまねき川はらにひねもすトロを押す男たち

工場村袖ふりはへてゆくわれらにあかんべえして見せし子どもら

親不知のふる道今は荒れはてゝみ草しけれり行く人をなみ

草しけり崖くづれたる親不知のふる道いまは萩のまさかり

草刈りの女がくれし山葡萄のその酸き味にこもる寂しみ

十月初旬佐渡が島に渡りて

佐渡が嶋眞野の入江は秋をふかみ波の穂白く日に光りつゝ

小夜ふけて櫂の音きこゆいねがてにひとり物おもふ
枕にちかく

佐渡が島眞野の入江の岸に咲く濱撫子の色のさみし
さ

野菊さくみさゝぎ道の松かけにたちとまりわが聴く
は虫の音〔眞野陵への道にて〕

初冬のころ

板屋根を降りすぎてゆく雨のおと秋もいよいよくれ
てゆくらし

夕まけていやあれつる浪の音の底にこもらふ海鳥
の聲

道のべに風に吹かるゝ枯尾花たちとまり聞けばかそ
かに鳴りるつ

大正十五年

大五十五平

冬ごもり

さびしさのきはまりぬれば夜をはやく寝る癖つきぬ
ことしの冬は

さびしさのきはまる底ゆほのほのと眠しづかに湧き
來たるらし

子どもらがひそまり物を書く音をきけばさひしも小
夜のくだちに

とく起きてさむき厨に吾妹子は今朝も朝餉のを米と
ぐなり

ゆふまけてとのもは雪となれるらし筆もつ指のいた
く冷ゆれば

屋根の雪の屋根をすべりておつる音聞の玻璃戸に月
あかりして

雪晴れ二首

雪晴の朝のすがしさとく起きて子等と門べの雪割り
にけり

門のべの雪をわりつゝあはぬ久しき隣の人と言ことかは
したり

上刈村所見

雪の上に散りて眞青き柚子の葉や雪ふりたまるまた
その上に

一月十五日早朝子等街上にあつまりて鳥追ひといふ行事をなす

まがつ鳥追はまくうたふ子どもらの聲は吹雪に打ち
消されつゝ

かね鳴らし大聲あけて子等がうたふ鳥追唄の何ぞさ
びしき

春近し

庭隅にけのこる雪の一とかたまりその一かたまりが
なかなか消えず

日あたりの雪の消え間のはこべ草みづみづしかもよ
その緑いろ

日あたりの雪の消え間のはこべ草のおのれ立ちなほ
るその強さはも

天てらす日かけぬくとみ軒のべに羽虫はとべり雪の
きえぬに

いきのみのいきの命のかなしさや羽虫はとべり春ま
ちがてに

物おもひ踏むにくだくる薄ごほりわがゆく野みち春
あさくして

わが足にふまれくだくるうすらひのそのかそかなる
音をきゝたり

雪ばれのさやけき空や大きなる風はあがれり悠然と
して

やすらけく舞へる風かもつなぎたる糸もあやつる手
もなきがごと

雀二首

窓さきの櫻の枝に來し雀とまるすなはち糞もらした
り

糞もらし暫く首をかたけるしが雀はやがてとび去りにけり

露の花

露の臺のほぐれて花となる見ればまさしく春になり
にけらしも



大正十五年五月十五日印
大正十五年五月十七日發
行 刷

【定價金貳圓】

御風歌集

著作者

相馬御風

發行者

神田豐穗

印刷者

小島為吉

印刷所

小島印刷所
東京市小石川區初音町八番地

發行所

東京市日本橋區數寄屋町一番地
株式會社
春秋社

電話 東京二四八六一番
大手二二二四番

日本古典普及叢書其他

望月世教著 新古事記 定價壹圓五拾錢 送料拾錢

上野松峰著 漂白西行 定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

荻原井泉水著 旅人芭蕉 定價壹圓六拾錢 送料拾四錢

荻原井泉水著 芭蕉選集 定價壹圓八拾錢 送料拾錢

島田青峰著 一茶選集 定價壹圓六拾錢 送料拾錢

荻原井泉水著 芭蕉と一茶 定價壹圓六拾錢 送料拾四錢

